
Brand new day

ふうる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Brand new day

【Nコード】

N6278J

【作者名】

ふつる

【あらすじ】

18歳になった誕生日に母・由紀子ゆきこからの手紙を受け取った遠野咲ののさき。それまで血の繋がらない父・陽仁はるひとと3人でなにひとつ不自由なく暮らしていたのだが…。変わる父娘の關係に揺さぶられる咲の未来は？

prologue・新しい日々のはじまりのじつ

18回目の誕生日を迎えた今日、咲の家に2通の手紙が届いた。2通とも差出人の名前は母・由紀子になっていて、これまで一度も手紙など遣り取りをすることなかった親子関係を思い、軽く頭をひねる。

1通は咲宛て、もう1通は父・陽仁宛てで、

「ハルさん。ユキさんから手紙」

咲は自宅のリビングで寛いでいた陽仁に母からの手紙を手渡した。

「ユキさんから手紙？」

陽仁も訝しそうにして受け取り、封を開けた。咲も陽仁の向かい側のソファに座り、手紙の封を開け、見覚えのある母の字が並ぶ便箋を広げた。

思いも寄らぬ内容に、想像すらできなかった未来が待っていると知らずに

咲へ

お誕生日おめでとう。

18年前の今日(この手紙を書いているのは咲の誕生日の3日前だけ)、咲が生まれてきたことをつい昨日のように思い出します。いつも一緒にいてあげられないけれど、私があなたをずっと愛していることを忘れないで下さい。

法律では成人は20歳だけど、私はあなたが18歳になったら一人前の大人として接しようと考えていました。

大人の咲へ伝えたいことがあります。

陽仁はあなたの血の繋がった父親でないことは分かっていますね？
彼はあなたの父親として私たち親子にとても良くしてくれたけれど、私たちの間に男女としての愛情はありませんでした。家族ではあつたけれど、夫婦にはなれませんでした。

このことを理解して、あなたが心の底から望むなら、あなたに陽仁をあげてもいいと思います。煮るなり焼くなり好きにきなさい。
あなたが陽仁と今のまま父娘でいたいなら、陽仁はあなたの思うようにしてくれるでしょう。

私はしばらく家に帰りません。

あなた達2人の関係が落ち着いたら、また会いましょう。
体に気をつけてがんばって下さい。

それでは、また会う日まで。

あなたの元にたくさんのお幸せが訪れますように。

遠野 由紀子

途中から目が滑るように感じて、何度も読み返した。けれども、何度読んでもやっぱり内容は変わらなかった。

何も言葉にできないまま咲が視線を上げると、向かい側で陽仁が手紙を握り締めたまま絶句していた。

1・家族が壊れた日

咲は生まれてこの方18年、普通に暮らしてきたと思う。世間一般でいうキャリアウーマンの母・由紀子は仕事で忙しく家を空けることが多い分、そこそこ名が知れた作家である父・陽仁がいつも家にいて、これまで咲の成長を見守ってくれていた。

血は繋がっていないことは物事が分かる頃には教えられていたので、我が家では「そういうもの」と実の両親と暮らす大多数の同級生との違いに悩んだり、思い余ってグれるなんてことは一切なかった。

むしろ、陽仁は咲の自慢だった。由紀子が40歳と同級生の母親の中でもかなり若い方だが、陽仁は由紀子に輪をかけて若い。当年とって33歳。あまりに若いので、あまり親しくない人には親戚のお兄さんと思われている節もある。

100点のテストの答案用紙を見て一緒に喜んでくれるのも、怖い夢を見た夜に抱きしめて安心させてくれるのも、全部陽仁だった。血の繋がりがなくても、そういう存在が「父」だと思っていた。余所の父娘よりよほど円満に過ごしてきたと咲は思う。

だが母からの手紙は、陽仁＝咲の父という認識を、覆すような内容に思えた。俄かには信じられず何度も読み返したが、どうやら思い違いや解釈違いではないらしい。

沈黙が続く部屋に、壁掛け時計の秒針が規則正しく時を刻む音だけが響く。

その時、いきなり陽仁が腕を伸ばした。ついビクツと反応してしまい、思わず意識し過ぎてしまう自分を恥ずかしく思い、咲は俯いた。陽仁はそんな咲を横目に、眉間に深い皺を刻んで、テーブルの上に置いてあった自分のケータイを取った。2、3回ボタンを押し

て耳にあて、しばらく発信音が聞こえているらしい。だが、すぐに息を飲んで、陽仁は体を起こした。

「もしもし、ユキさん？」

電話が繋がったらしい。そして相手は案の定由紀子だった。

「そうだよ。手紙届いて読んだよ。なんだよあれ」

普段からは想像できないくらい、語気を強めて問い詰める陽仁の様子を目の当たりにして、咲は息を詰めた。

「なんでユキさんが出て行くんだよ！…は？そんなのユキさんの勘違いだつて。それに、咲は受験生なんだ。こんな時期によりにもよつて…それに出て行くなら俺の方でしょうが。血の繋がりが無いのは俺なんだから」

不意に胸が痛む気がして、咲は俯いた。確かに咲と陽仁には血の繋がりは無い。だが、それを陽仁の口から聞くのは、どうしても分かれないけれど、辛い。あまり言葉にして欲しくないように思う。「どうせ咲が高校卒業したら、出て行こうと思つたのに」

咲は思わず陽仁のそばに駆け寄つて、陽仁のケータイを持っている方の腕を掴んだ。

陽仁が出て行く。

それは咲には堪え難いことに思えて、引き留めずにはいられない。「とにかく、一度帰ってきてよ。咲だつてすごくショック受けてる…なんだよそれ。は？転勤？…先月辞令出てたなら、どうして早くおい…」

腰を浮かしかけた陽仁は、脱力したようにソファに体を埋めた。

「切れた」

もう一度かけ直したが、繋がらないようだった。陽仁はケータイを放り投げるようようにテーブルに置いた。

「出て行くつて」

喉がカラカラに乾いて、思うように声が出ない。それでも搾り出すようになんとか言った。

だが、陽仁は何も言わない。咲のことを見ようとせせず、天井を仰いでいるだけだ。

『あなたが心の底から望むなら、あなたに陽仁をあげてもいい』

手紙の中の母の言葉が、脳裏で母の声でこだまする。

「夫婦」ではない父と母。正直、「両親」が「夫婦」でないことがどういうことか理解できない。そして、「陽仁をもらう」ことがどういうことか分からない。

咲は陽仁の腕を掴んでいたままの指の力を強めた。

ただ、この腕を放すことはできない。それだけは強く明確に感じている。

「どこにも行かないで…ハルさん…」

咲の願い事にいつもは優しく頭を撫でて微笑む陽仁なのに、今日だけは何の反応もなく。それでも振りほどくことをせずにいる陽仁に咲は強くしがみついた。

2・特別の意味1

終わらないように思えるほど長い夜も、いつかは明ける。それをこれほど痛感する朝がこれまでにあっただろうか。

咲は目を覚ますと、制服のまま眠っていたことに気づき、顔をしかめた。

昨夜は手紙を読んだ後しばらく陽仁と呆けた後、自室に戻った。着替えないままベッドでぼんやりしていたらいつの間にか眠っていたようだった。制服は皺になり、髪の毛も乱れているのが分かる。口元に涎の跡さえ認められて、ため息をついた。

お調子者ではないつもりだが、どんなに深刻な事態を迎えても、やっぱりヒロインにはなりきれないのが自分らしいと咲は思った。おまけに、ぐう、とお腹までなつた日には、どんな非日常でも生きるという本能に忠実な生き物であることを嫌と言うほど自覚した。

「ご飯食べよ」

自分に弾みをつけるように呟いて、立ち上がった。

リビングに入ると、カウンターキッチンに立つ陽仁の姿が見えた。陽仁の仕事が立て込んでいないときは、陽仁は咲が通学するのに合わせて朝食と弁当の仕度をする。

どうせ咲が高校卒業したら、出て行こうと思ってたのに

昨夜の母との電話での陽仁の声が耳について離れない。しかし、いつも通りの光景に頬が緩み、

「おはよう」

と、いつも通りの挨拶をした。

「おはよう」

朝食の仕度を続ける陽仁の返事が聞こえて、身体の強張りを解いた。無意識に緊張していた自分に咲は内心で苦笑した。

あと数日で始業式を迎えれば、咲は高校3年生となる。と言って

も、4月1日からは新学年に進級するので、既に高校3年生になったのだが。県下有数の進学校に通い、大学受験を控えている身である。春休みといえど、既に補習授業で毎日の通学は欠かせない。

シャワーを浴びて、皺のない制服に着替え、陽仁の作った朝食を食べた。年頃の娘と言えど、咲の辞書に「食べ残し」の文字はない。陽仁が丁度よい量を配膳するので、無理なく食べられるのだ。

「ごちそうさまでした」

箸を置いて、席を立つ。向かい側で一緒に朝食を摂っていた陽仁の皿はまだたくさん残っていた。いつもならもつと食べるように言うのだが、仕事のメ切前や思うように捗らないときに食欲が減退するらしい。陽仁は結構神経が細かいのだ。

結局何も言わずに咲は洗面所へ歯磨きをしに行き、髪形を整えて、かばんを持ってリビングに戻った。

咲が席を立ったときのままの食卓に、陽仁の隠しきれない疲労と動揺を見た気がした。

「晩御飯は私が作るからね。今日は家にいるでしょ？」

帰りに買い物しようと思費の入った財布と折りたたみ式のエコバッグをかばんに入れた。返事のないままの陽仁に、念を押すために目を合わせた。

「ハルさんの好きなもの、作ってあげるからね」

どこにも行かないでね。

そんな気持ちを含めて陽仁の目を見つめた。心なしか少しやつれた風な陽仁に笑いかける余裕があることに、咲は自分自身に驚きながら。

2・特別の意味2

一人になると、由紀子からの手紙の一節が、彼女の声になって咲の頭から離れない。

あなたに陽仁をあげてもいい

「あげてもいい」なんて、一人の人間をモノのように扱うなんて、陽仁に対して失礼だ。

咲はそう思うが、由紀子が簡単に他人を、否、家族である陽仁をモノ扱いするような人間ではないはずだ。だからこそ、敢えてそんな表現を選んだ由紀子の思惑が何かしらあるはずだと咲は考える。だがしかしその由紀子の思惑なんか、考えても考えても分からない。正確には考えても考えても、いつの間にかループして思考は最初に戻るのだ。

陽仁は咲の父親であってそれ以外の何者でもない。

そうだ、由紀子の手紙には、咲が望めば陽仁と親娘でいられると書いてあったのだ。心配することはなにもない。

すぐに、いつもの日常に戻るのだ。

無理やり　とは咲本人は気付いていないが　無限ループ
になりつつあった思考から抜け出したとき、いつの間にか咲は学校の昇降口に着いていた。

「遠野、おはよう」

咲が脱いだ靴を下駄箱に片付けようとしゃがんだ時、頭上から声がした。爽やかなテナー。

「あっおはよう」

立ち上がると、咲の目線のちょっと上に、声に負けず爽やかな笑顔が咲を見つめていた。

「河野君」

咲と同じ理系進学クラスの河野保であった。

「今日終わったら時間ある？」

「うん」

咲の返事に河野の唇がきれいな弧を描いた。河野はあっさりとした顔立ちの涼しげな顔立ちだが、笑うと印象が少し変わる。

「終わったら待ってて」

「真結にも言つところか？」

真結というのは、1年のときに河野と咲と同じクラスだった都賀真結子のことだ。咲は高校入学直後に出席番号が並ぶ真結子と仲良くなり、真結子の幼馴染の河野とも知り合った。2年進級時に、理系大学進学希望の咲と河野は同じクラスになったが、文系大学進学志望の真結子はクラスが離れていた。

だが、咲が高校で一番仲が良いのは真結子と河野で、真結子と河野の部活動が休みのときなどは、同じ最寄駅ということもあって3人で行動することはよくある。ちなみに、咲は帰宅部である。由紀子や陽仁には部活動をするように勧められたが、気が向かなかった。

「私パス」

咲の背後から、当の真結子本人の声がした。

「用事あるし」

そつけない真結子の言葉に河野が何か言つかと思いきや、そのまま彼は一人で立ち去った。

「あら、デートの約束？」

下駄箱の前で同じように靴を脱いでいた同じクラスの塩崎優衣から声をかけられた。

「そんなんじゃないよ」

間髪入れずに反応した咲に、優衣は首をかしげた。

「咲と河野って付き合ってるんでしょ？」

「まさかっ」

確かに、咲と一番親しい男子といえば河野である。しかし、だからと言って「付き合っている」と直結するわけではなく、咲には全くそんなつもりはなかった。

「みんな咲と河野は付き合ってると思ってるよ」

優衣は言いたいことを言って、自分はさっさと教室へと立ち去った。

「みんなすぐに付き合うとか彼氏とか言うんだね。…そういうんじゃないのに…。ね？真結？」

咲はずっと背後に佇んでいた真結子を振り返った。

「そうだね」

真結子は口元を歪めて苦笑したように咲は見えた。その真結子の歪んだ口元が彼女らしくなく、咲はもう一度名を呼んだ。

「真結？」

「授業、始まる。先に行くよ」

先に歩き出した真結子の背を見つめて咲は思った。

真結子も河野も咲の大切な友達なのだ。2人へのそれぞれの思いのどちらも遜色はない。

どうして、異性同士だと「付き合う」とか「彼氏彼女」とか、短絡的に恋愛を絡ませるのだろうか。

「全然そんなじゃないのに」

釈然としない思いを抱えたまま、咲は真結子の背を追いかけた。

2・特別の意味3

いつもと変わらず補習授業が終わり、部活に合流する者、塾に行く者、教官室へ教師に突撃しに行く者、そのまま帰る者、それぞれが散り散りになった。

咲が教科書やノートを片付けていると、
「デートか。良いねえ」

参考書片手の優衣がニヤリと笑って、咲のそばをすり抜けた。優衣は教官室へ突撃組らしい。いつか言っていた「学費分モトとらな」と言う言葉は本気だったらしい。

「そんなんじゃないのに」

「って思ってるのは咲だけよ。河野君いいじゃないの。見た目も良し、頭も良し、優しいし。女の子みんなが憧れる王子様よ」

「そんな身も蓋もない」

優しくて親切に接してくれる友人である河野に対して、そのような値踏みするような見方は失礼ではないのか。

そんなことを考える咲の考えを読むように、優衣は咲の顔を覗き込んだ。

「河野がどうして咲に優しくしてくれるのか考えてみなよ。河野は皆に咲に対するように優しくはないよ」

話の流れが怪しい方向へ向かい始めたように思えて、咲は内心に苦々しく思った。

「それは優衣ちゃんの考えすぎ」

「現実見ないと、咲のそういうところが原因で傷つく人がいるってこと、気付いた方がいいよ」

優衣の言葉から茶化した声音が消えて、切っ先の鋭い小さなナイフの刃先のような冷たさだけが残った。

「少しずつでいいんだから」

咲よりも小さな優衣が背を伸ばして、咲の頭をひとなでした。そ

の手が優しく温かくて、優衣が咲の気分をわざと害しようとしたり、茶化したりしたわけではないことに気付いた。優衣が本気で案じて伝えてくれたのだ。

何も言えない咲に微笑むと優衣は今度こそ教室を後にした。その後姿を見送っていると、すれ違うように河野が教室に入ってきた。

河野と肩を並べて歩きながら、咲は思った。やっぱり、優衣の言っていたことは見間違いだったのだと。

河野と2人きりになることは滅多にはないが、これまでに全くなかったことではない。2人でいても、真結子と3人でいるときと変わったことはなく、穏やかな時間が流れていく。

一緒に高校の最寄の駅から電車に乗り、3駅先の2人の自宅の最寄り駅で電車を降りた。改札口を出て左側の商店街を抜けた先にある住宅街に自宅のある真結子と河野と、右側に出て幹線道路を5分強歩いた先にあるマンションに住む咲は、いつもここで別れる。

だが、改札口を出て河野は右側に踏み出した。咲は自分の自宅の方向なので、何も言わず連れ立って歩いた。この先にたまたま河野の用事があるかもしれないと思ったのだ。

普段から河野は饒舌な方ではない。だからと言って決して寡黙ではないが、3人にいるときには、真結子が主に喋って、それに咲が返事をしたり、河野が軽く突っ込んだりしていた。

今日は真結子がいらないせいか、会話と言うほどのやり取りはない。ただそれで、気を遣って話題を探そうとか無理に喋らなければならぬと言つようなプレッシャーは感じない。それはそれで、良いと咲は思う。変な気を遣わずにいさせてくれるのが、河野の優しさだと分かっていった。

そのまましばらく歩いて、桜並木が見えてきた。咲のマンションと目と鼻の先に公園があり、その桜並木を抜けると、マンションのエントランスはすぐだ。

幹線道路の歩道から公園に入るところで、河野が立ち止まった。

「遠野」

「ん？」

咲も立ち止まると、河野は咲に向かい合った。

「髪に桜の花びらついてる」

薄く微笑んだ河野の表情がはつとするほど綺麗で、咲は小さく息を飲んだ。

河野は皆に咲に対するように優しくはないよ

不意に優衣の言葉が脳裏に木霊したような気がした。

優衣の意図がなんだか分かったような気がしたが、そのことについて深く考える覚悟が定まらない。

咲の肩のラインより少し長い髪の毛をひと房掴んで、河野は長い指でひとひらの花びらを摘んだ。

「ほら」

そうして柔らかな笑顔を先に向けて微笑んだ。

「ありがとう」

咲は心がコトリと音を立てたような気がした。そして、次の瞬間、

「！」
声にならない悲鳴を上げた。

手が引かれて、頬がグレーのブレイザーの胸元に直接当たり、背にガツチリとした男子の腕が回されたことが分かった。

「遠野。好きだ」

耳元で囁かれる声が、これまでに聞いたことのない甘やかさで、咲ははつとして顔を見上げた。

「河野君」

射抜くような真っ直ぐな一對の瞳が近づいて咲の視界いっぱいになったとき、唇に柔らかくて温かなぬくもりが触れた。

キスされていると咲が気付いたときには、驚きのあまり体から力が抜けて、どうすることもできなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6278j/>

Brand new day

2010年10月12日04時18分発行